

白洲次郎

日本開発銀行が創立され、丸ノ内の工業クラブでその創立ティパーティーが開かれた時のことである。わが国朝野の有力者が多数招かれていた。私は当時大蔵省にいたので、その末席をけがしていた。

ところがその席に白洲次郎さんが居合せて、私にこう言うのである。「どうだい随分と名士が多いではないか。恐らく日本の一流の実業家は大抵集っているように思える。しかし日本の実業家も何とお粗末になつたではないか」

私は返す言葉もなく呆気にとられていると白洲さんはなおも続けて、「君、一体日本の会社で黒字を出している会社があると思うかい。みんな本当は赤字なんだぜ。例外なく戦前の遺産を喰いつぶしている始末だぜ」と独白するように言うのであった。

白洲さんという人は口が悪いことで有名な人だが、その言うことには齒に衣をきせないで、真実をうがった観察がこめられていて、後になって色々考えさせられることが多い人である。

経営（特に資本とは言わない）と労働の両陣営が、過去の遺産の上にアゲラをかいている日本の現状には、大きい反省が要請されているわけだが、なれるということはこわいことで、われわれは案外それに気付かないでいる場合が多いのではなからうか。

（昭、三〇・一〇）